

新興国・途上国の輸入市場における日本のプレゼンス変化

—日中韓のシェアの比較から—

調査部

上席主任研究員 大泉 啓一郎

要 旨

1. 本稿は、新興国・途上国の輸入市場の現状を踏まえ、わが国のプレゼンスの変化、その特徴と課題を整理するものである。
2. 2000年以降、新興国・途上国の実質GDP成長率は先進国の約2倍の水準で推移してきた。その結果、新興国・途上国が世界のGDPに占めるシェアは2000年の20.1%から2013年には38.7%に上昇した。これに伴って新興国・途上国の輸入も急速に拡大しており、その市場の開拓と確保は、わが国と日本企業にとって重要な戦略となっている。
3. わが国の新興国・途上国向け輸出は、2000年の1,210億ドルから2013年には3,210億ドルに増加しているものの、新興国・途上国の輸入におけるシェアは、同期間に9.3%から6.5%へ低下した。日中韓のシェアの変化を比較すると、日本の輸出が韓国や中国と厳しい競争にさらされていることがわかる。
4. 中国の輸入における日本のシェアは2000年の18.4%から2012年に9.8%に低下した。自動車部品や工作機械などでは高いシェアを維持しているものの、半導体や光学機器などの電子関連製品・部品は大幅にシェアを落としている。これらは、韓国がシェアを上昇させた品目と一致するものが多く、韓国との競争への対策が急務である。
5. ASEAN（シンガポールを除く）の輸入における日本のシェアは、2000年の20.6%から2012年には13.6%に低下しているものの、総じて競争力はまだ高い。とくにエンジン関連製品や自動車用部品では圧倒的な競争力を持っている。ただし、電子関連製品・部品は中国との競争が厳しくなる傾向にあり、プレゼンスを維持する対策が必要である。
6. その他新興国・途上国の輸入におけるシェアは、2000年の4.2%から3.0%に低下した。とくに電子関連製品・部品での中国との競争が厳しい。自動車関連以外の輸出品目は少なく、輸出戦略を全面的に見直すべきである。
7. わが国の新興国・途上国向け輸出は金額では増加しているものの、その輸入市場拡大の効果を十分に吸収しているとはいえない。とくに価格競争力の高い中国製品と厳しい競争関係にある製品については、ASEANなどで生産・輸出する体制をより強化する必要がある。また、日本の競争力があるといわれる資本財や中間財・部品でも優位性を失いつつある点は軽視してはならない。品質の向上に加えて、市場開拓と確保に向けてマーケティングを強化する必要がある。

目次

はじめに

1. 新興国・途上国経済の台頭と変わる貿易地図

- (1) 新興国・途上国経済の台頭
- (2) 新興国・途上国の輸入構造の変化

2. わが国の新興国・途上国向け輸出

- (1) 日本の新興国・途上国向け輸出
 - (2) 中国・韓国との競合
- BOX：RCA（Revealed Comparative Advantage）について

3. 中国の輸入における日本のプレゼンス

- (1) 中国の輸入市場の現状
- (2) 日本の中国向け輸出
- (3) 韓国との競合関係

4. 日本のASEAN向け輸出

- (1) ASEANの輸入市場の変化
- (2) 日本のASEAN向け輸出
- (3) ASEANにおける中国と韓国との競合

5. 日本のその他新興国・途上国向け輸出

- (1) その他新興国・途上国
- (2) その他新興国・途上国の日本からの輸入
- (3) 中国と韓国との競合関係

まとめ

はじめに

本稿は、新興国・途上国の輸入市場の現状とわが国のプレゼンスの変化を考察するものである。

2011年以降わが国の貿易収支は3年連続で赤字となり、2013年の赤字幅は1,219億ドルと過去最大となった。貿易赤字の主因は、原発停止による液化天然ガスの輸入増加にあるが、最近では輸出競争力の低下が懸念されているようになっている。たとえば、経済産業省『通商白書2013』は、世界輸出に占める日本のシェアや貿易特化係数から、わが国の輸出競争力が緩やかに低下していることを指摘している。

本稿では、日本の新興国・途上国向け輸出競争力を、当該国・地域の輸入統計における日本のシェアの変化、「顕示的比較優位指数（Revealed Comparative Advantage: 以下RCA）」（詳細はBOX参照）、中国と韓国との競合関係から検討する。

新興国・途上国を対象にしたのは、2000年以降、新興国・途上国の経済成長が目覚ましく、その実質GDP成長率は先進国を大きく上回っており、加えて、わが国において人口減少と少子高齢化が進むなかで、国内市場に大幅な拡大が見込めないため、新興国・途上国市場の開拓・確保が不可欠と広く認識されるようになっているからである。IMFが4月に発表した『世界経済展望（World Economic

Outlook)』によれば、2013年の新興国・途上国の成長率は4.7%と、先進国の1.3%の3倍以上の水準にあり、今後5年間の成長率も5.3%と先進国の2.3%を大幅に上回る見込みである。

本稿では、新興国・途上国を中国、ASEAN（シンガポールを除く加盟9カ国）、その他新興国・途上国の3つに区分し、主にSITC 3桁260品目について日本の輸出（相手国・地域の日本からの輸入）の重要度を考察した（注1）。

本稿の構成は以下の通りである。

1. では、新興国・途上国経済の台頭の現状と、それに伴う貿易構造の変化を概観する。2. では日本の新興国・途上国向け輸出の特徴を示し、3. では、中国、4. では、ASEAN、5. では、その他新興国・途上国の輸入市場における日本のプレゼンスを明らかにする。6. では、本稿で見出された結果を整理するとともに、わが国の輸出拡大に向けての取り組み課題を提示する。

なお、本稿では、先進国、新興国・途上国に属する国・地域はIMFの定義に従った（注2）。また、貿易統計は国連のデータベース（COMTRADE）を活用し（注3）、新興国・途上国市場を分析対象とするため、ASEANはシンガポールを除く加盟9カ国とした。

（注1） SITC（Standard International Trade Classification）は国際連合が作成する標準国際貿易商品分類に基づくもので、本稿ではその第3版（Revision 3）を用いた。

（注2） 先進国（advanced economies）は、IMFの定義に従っ

た。含まれる国は、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、カナダ、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、香港、アイスランド、アイルランド、イタリア、日本、韓国、ラトビア、ルクセンブルク、マルタ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、サンマリノ、シンガポール、スロバキア、スロベニア、スペイン、スウェーデン、スイス、台湾、イギリス、アメリカの36カ国・地域（<http://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2014/01/weodata/groups.htm#ae>を参照）。

（注3） 本稿で使用した貿易データは<http://comtrade.un.org/>からダウンロード出来る。

1. 新興国・途上国経済の台頭と変わる貿易地図

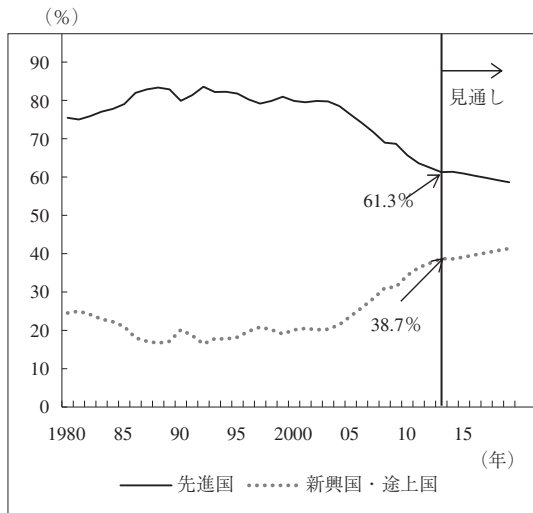
(1) 新興国・途上国経済の台頭

最初に新興国・途上国経済の台頭について確認しておきたい。

2000年以降、新興国・途上国経済の躍進は目覚ましく、名目GDPは2000年の6兆5,910億ドルから2013年には28兆6,440億ドルと4.3倍以上に拡大した。わが国の経済規模と比較すると、2000年は1.4倍であったが、2013年は5.8倍になっている。

図表1は、世界の名目GDPに占める先進国と新興国・途上国の比率の変化をみたものである。2000年前後から構造が大きく変化していることがわかる。1990年代までは、世界人口の2割にも満たない先進国経済がGDPの約8割を占めていた。反対にいえば、人口の8割を占めていた新興国・途上国の経済規模は2割にとどまっていた。このような格差から生じる様々な問題は「南北問題」と呼ばれて

図表1 名目GDPのシェア



(資料) IMF, World Economic Outlook, April 2014

きた。

しかし、2000年以降、新興国・途上国の成長率は先進国のそれを大幅に上回ったため、名目GDPの世界に占めるシェアは2000年の20.1%から2013年には38.7%に上昇した。最近では、先進国経済が復調する一方で、新興国・途上国経済にこれまでの勢いがみられなくなっているものの、新興国・途上国の成長率は今後も先進国を上回る見込みであり、IMFの経済見通しによれば、2019年に新興国・途上国のシェアは41.4%に上昇する見込みである。このトレンドを延長すれば、2020年代末までに新興国・途上国の経済規模は先進国に追いつき、追い越すことになる(注4)。

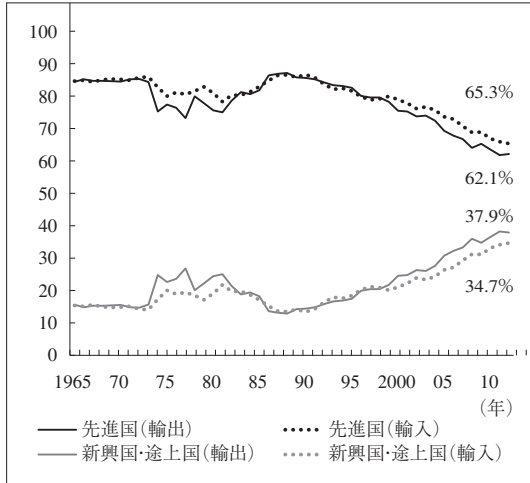
このような新興国・途上国経済の台頭は経済のグローバル化の加速を背景とするもので

ある。具体的にいえば、貿易や外資に対する規制緩和、コンピュータの発達とインターネットの普及などの情報通信革命、陸海空の運輸システムの発展に伴う輸送コストの低下などにより、ヒト、モノ、マネー、情報の流れが加速度的に拡大し、その波が、新興国・途上国の隅々まで行きわたるようになった結果である。

このような経済規模の拡大に伴い、新興国・途上国の貿易額が急増した。新興国・途上国の輸出は2000年の1兆5,460億ドルから2012年には6兆3,580億ドルに、輸入も同期間に1兆3,770億ドルから6兆690億ドルに増加した。その結果、世界貿易における先進国と新興国・途上国のシェアは、図表1の名目GDP比率の変化と同様のトレンドを描いている(図表2)。世界の輸出に占める新興国・途上国の割合は、2000年の24.6%から2012年には37.9%に、輸入は同期間に21.1%から34.7%に上昇した。

1990年代まで新興国・途上国の主要輸入相手は先進国であり、7割以上を占めていた。しかし、2000年以降、とくに日米欧からの輸入は軒並みシェアが低下している。アメリカは2000年の19.4%から2012年に10.4%、EU15は23.0%から17.6%、日本は9.3%から6.5%に低下した。このようななか、NIEsは11.6%から11.1%とほぼ同水準を維持しており、とくに韓国は4.0%から5.1%に上昇している(図表3)。

図表2 先進国と新興国・途上国の輸出入シェア (%)



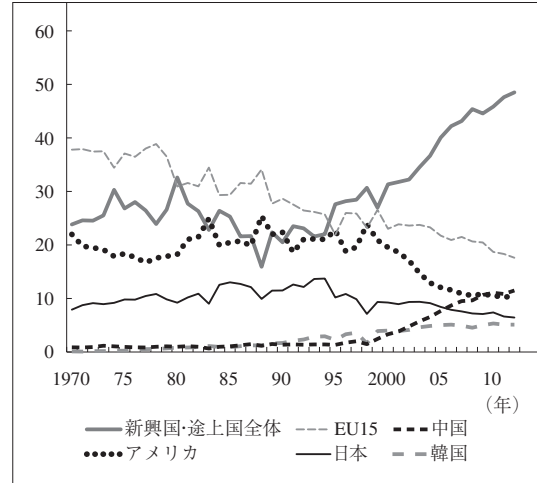
(注) 数値は2012年。
(資料) UN, COMTRADEより作成

他方、新興国・途上国からの輸入は2000年の4,314億ドルから2012年には2兆6,450億ドルに5倍以上に増え、シェアも31.3%から48.5%に上昇している。なかでも中国からの輸入の割合は2000年の3.3%から2012年には11.5%に急上昇している。

(2) 新興国・途上国の輸入構造の変化

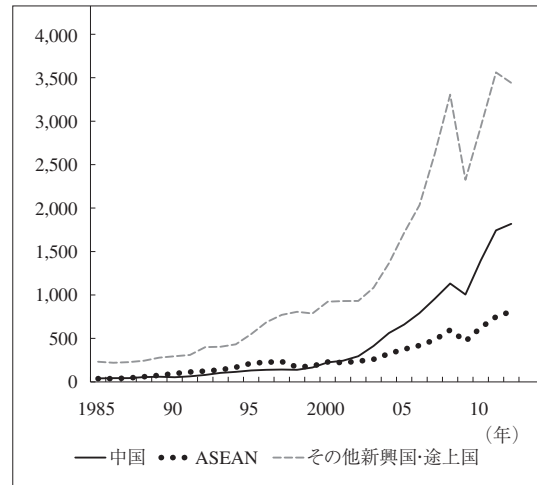
新興国・途上国を、中国、ASEAN（シンガポールを除く9カ国）、その他新興国・途上国の3つに区分すると、中国の輸入は2000年の2,250億ドルから2012年に1兆8,180億ドル、ASEANは同期間に2,290億ドルから8,110億ドルに、その他新興国・途上国は9,230億ドルから3兆4,400億ドルに増加した(図表4)。2012年時点では、新興国・途上国

図表3 新興国・途上国の輸入相手国・地域 (%)



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表4 新興国・途上国の輸入額の推移 (10億ドル)



(資料) UN, COMTRADEより作成

の輸入全体に占めるシェアは、中国が30.0%、ASEANが13.4%、その他新興国・途上国が56.6%である。

2000年と2012年の輸入額を比較すると、中国が8.1倍と際立って高いが、ASEANも3.5倍、その他新興国・途上国も4.4倍と先進国の2.2倍を大幅に上回っている。

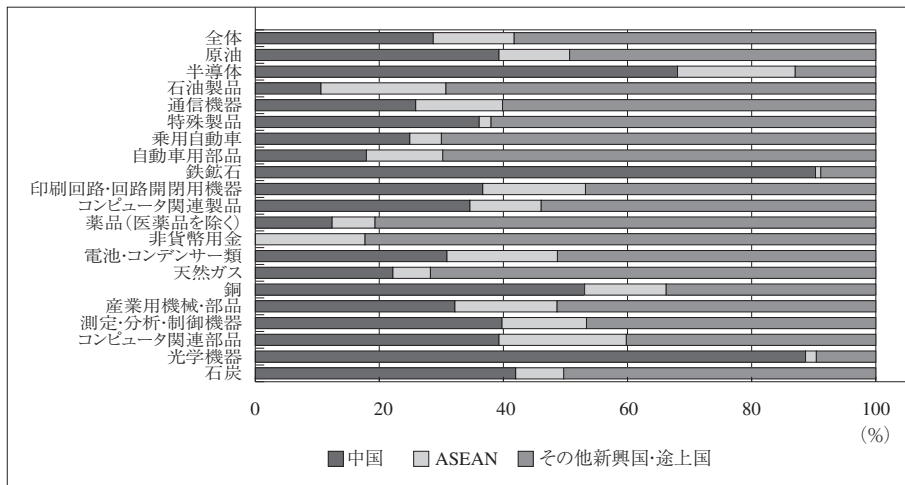
新興国・途上国の輸入をSITC 3桁260品目でみると、第1位が原油（品目コード：333、金額：5,618億ドル、以下同じ）、第2位が半導体（776、3,232億ドル）、第3位が石油製品（334、3,114億ドル）、第4位が通信機器（764、2,016億ドル）、第5位が特殊製品（分類出来ないもの）（931、1,906億ドル）、第6位が乗用自動車（781、1,827億ドル）、第7位が自動車用部品（784、1,232億ドル）、第

8位が鉄鉱石（281、1,059億ドル）、第9位が集積回路（772、1,051億ドル）、第10位がコンピュータ関連製品（752、1,015億ドル）の順になっている。

新興国・途上国の輸入市場は一樣ではなく、当然のことながら品目によって国・地域の占めるシェアは異なる。図表5は、新興国・途上国の輸入上位20品目について、中国、ASEAN、その他新興国・途上国に区分したものである。

たとえば、半導体は中国が68.1%と高く、ASEANの19.0%を加えると87.0%となる。これは、中国やASEANが電子製品生産において世界的な生産拠点になっていることを反映するものである。また、中国は鉄鉱石や光学機器でも高いシェアを有している。他方、石

図表5 新興国・途上国の輸入（品目別シェア：SITC3桁；2012年）



(資料) UN, COMTRADEより作成

油製品や乗用自動車、自動車用部品、薬品（医薬品を除く）、非貨幣用金、天然ガス、銅などでは、その他新興国・途上国の割合が高い。ASEANは、半導体、石油製品、コンピュータ関連部品の輸入比率が相対的に高いという特徴がある。

(注4) 新興国・途上国経済の台頭は、リーマン・ショックの後に生じたトレンドではない点に、留意したい。加えて、名目GDPの算出に用いられる名目を替レートは、新興国・途上国の実態が過小評価されている点にも注意したい。これに配慮した購買力平価ベースのGDPを用いれば、新興国・途上国の名目GDP比率の上昇は、1990年代から始まり、規模は2013年に先進国と肩を並べている。

2. わが国の新興国・途上国向け輸出

(1) 日本の新興国・途上国向け輸出

このように拡大する新興国・途上国の輸入に対して、わが国の輸出はどのように対応しているだろうか。

日本の全世界向け輸出額は、1990年の2,870億ドルから2000年に4,790億ドル、2013年には7,100億ドルに増加した。元来、資源が乏しいわが国は、海外から鉱物資源や材料を輸入し、これを加工して世界に輸出することで成長してきた。とくに高度成長期から今日まで、わが国の主たる輸出先は先進国であった。

しかし、わが国の主要輸出相手にも変化がみられる。

先進国向け輸出のシェアは、1989年の

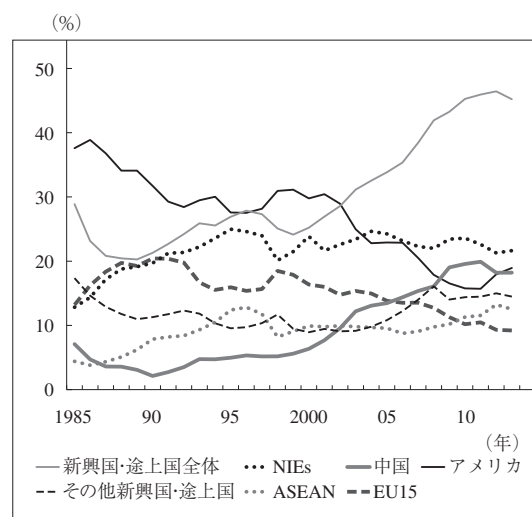
79.7%をピークに2013年には54.8%に低下した。アメリカ向けが1990年の31.7%から2013年には19.0%へ、EU15向けも20.4%から9.2%に低下した（図表6）。

他方、新興国・途上国向け輸出額は、1990年の610億ドル、2000年の1,210億ドルから2013年には3,210億ドルに増加した。とくに2000年以降加速度的に増加している。その結果、輸出全体に占める割合も2000年の25.2%から2013年には45.2%に上昇した。国・地域別にみると、中国が6.3%から18.2%に、ASEANが9.9%から12.5%に、その他新興国・途上国が8.9%から14.5%に上昇している。

次に、2012年のわが国の全世界向け輸出上位品目をみてみよう。

第1位が乗用自動車（781、975億ドル）、

図表6 日本の輸出相手国・地域



(資料) UN, COMTRADEより作成

第2位が半導体（776、418億ドル）、第3位が自動車用部品（784、415億ドル）、第4位が特殊製品（931、355億ドル）、第5位が産業用機械・部品（728、297億ドル）、第6位が電池・コンデンサー（778、229億ドル）、第7位が船舶（793、222億ドル）、第8位が印刷回路・回路開閉機器（772、204億ドル）、第9位がエンジン関連製品（713、199億ドル）、第10位が測定・分析・制御機械（874、195億ドル）となっている。これら上位10品目で輸出全体の46%を占める。

輸出先を先進国と新興国・途上国に区分すると、その比率は品目ごとに異なる（図表7）。

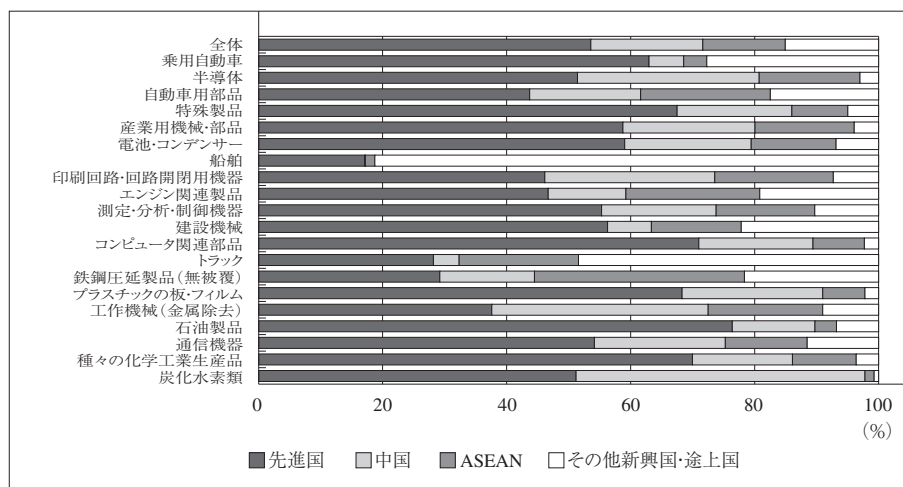
たとえば、第1位の乗用自動車では先進国が63.0%と多く、新興国・途上国では、その他新興国・途上国が27.7%と多い。他方、中国

は5.6%、ASEANは3.7%と低水準にある。これは、中国やASEANでは日本の自動車メーカーが現地生産を本格化していることを反映したものである。

他方、第3位の自動車用部品は、新興国・途上国が56.3%と、先進国の水準を上回っている。新興国・途上国向けでは中国が17.9%、ASEANが20.9%、その他新興国・途上国が17.5%とほぼ均衡している。中国やASEAN向けの自動車用部品の輸出が多いのは、前述の乗用自動車の輸出が少ないこと、現地生産の本格化が進んでいることと整合的である。

第2位の半導体では、先進国向けが51.4%と半分を占めるものの、内訳をみるとNIEsが約8割（40.2%）を占める。新興国・途上

図表7 日本の新興国・途上国向け輸出（品目別シェア：SITC3桁；2012年）



(資料) UN, COMTRADEより作成

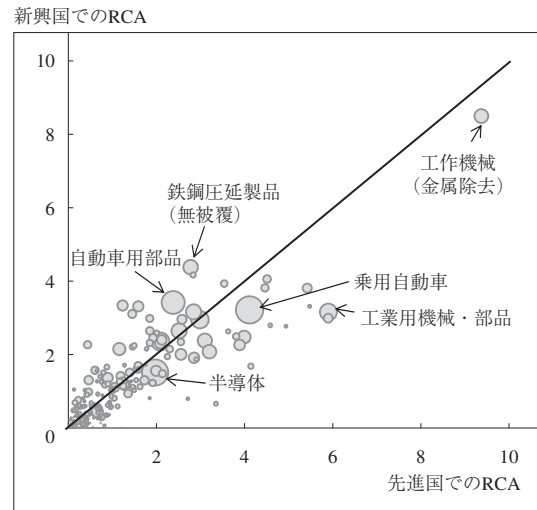
国では中国が29.3%、ASEANが16.3%と高く、その他新興国・途上国のシェアは3.0%と極めて低い。NIEs、中国、ASEAN向けを合算すると実に85.8%に達する。これは東アジアに電子製品のサプライチェーンが広がっており、わが国がその重要な供給地になっていることを示すものである。第5位の産業用機械・部品、第5位の電池・コンデンサー、第7位の印刷回路・回路開閉用機器でも、中国、ASEAN向けが多いのは、2000年以降、東アジアへの生産拠点の移転が加速していることを反映するものである。逆に第6位の船舶は、その他新興国・途上国向けが81%と圧倒的に多い。

さて、新興国・途上国において、どのような製品が競争力を持っているのだろうか。

ここでは一般的に輸出競争力の評価に用いられる「顕示的比較優位指数 (Revealed Comparative Advantage: 以下RCA)」を利用する。RCAの算出方法についてはBOXに記したが、RCAが1より高い場合、その品目の輸出競争力は強いと判断し、1より低い場合、競争力は弱いと判断する。なお本稿では、RCAを対象国・地域ごとの輸入統計から計算した。

図表8は、縦軸に新興国・途上国の輸入市場における日本のRCA、横軸に先進国の輸入市場における日本のRCAを品目ごとにプロットしたものである。バブルの大きさは2012年の輸入額（日本の輸出額に相当）の規模を示

図表8 新興国・途上国の日本からの輸入RCA (品目別：2012年)



(注) 円の大きさは金額の大きさを示す。
(資料) UN, COMTRADEより作成

す。図表において、縦軸で1を超え、45度線よりも高い位置にある製品は、新興国・途上国での競争力が先進国よりも強いことを示す。

全体的にみれば、バブルはほぼ45度線近辺に分散しており、先進国と新興国・途上国向けで競争力に大きな差がないようにみえる。つまり工作機械などのように先進国で競争力の高い品目は、新興国・途上国でも高い競争力を有している。ただし細かくみると、乗用自動車は先進国でのRCAが4.1で新興国・途上国の3.2よりも高く、半導体も先進国でのRCAが2.0と新興国・途上国の1.5よりも高い。また、自動車用部品は新興国・途上国でのRCAが3.4と先進国の2.4よりも高いが、大きな差異があるとはいえない。

もちろん、先進国と新興国・途上国でのRCAの差異が大きい品目もいくつか存在する。たとえば、新興国・途上国でのRCAが1.5を超え、先進国でのRCAよりも1.5倍以上高い品目が15品目存在する。金額の大きいものでは、鉄鋼圧延製品（無被覆）、トラック、合金鉄圧製品、鉄鋼圧延製品（被覆）がある。逆に、先進国でのRCAが1.5を超え、新興国・途上国でのRCAが1.5倍以上高い品目は12品

目あり、金額の大きいものからあげると、産業機械・部品、コンピュータ関連部品、建設機械、プラスチックの板・フィルム（液晶の素材）などが該当する。

(2) 中国・韓国との競合

次に、新興国・途上国におけるわが国の競争力を中国と韓国との関係から考察する（注5）。

BOX：RCA（Revealed Comparative Advantage）について

たとえば、日本のA製品のRCAは以下の式で算出される。

$$\text{日本のA製品のRCA} = \frac{\text{日本のA製品の輸出額/日本の輸出総額}}{\text{世界のA製品の輸出額/世界の輸出総額}}$$

分子は日本の輸出に占めるA製品のシェアであり、分母は世界の輸出製品に占めるA製品のシェアである。RCAは0～∞の値を取り、その値が1を超えた場合は、日本のA製品の輸出は世界市場のなかで比較優位を持つと判断される。

本稿では、輸入データを用いるので上式を下記で代替する。

$$\text{日本のA製品のRCA} = \frac{\text{世界の日本からA製品の輸入額/世界の日本からの輸入総額}}{\text{世界のA製品の輸入額/世界の輸入総額}}$$

さらに本稿では、この考え方を新興国・途上国における日本からの輸入品の競争力を評価するために援用する。

B国・地域の日本のA製品のRCAは以下の式で算出される。

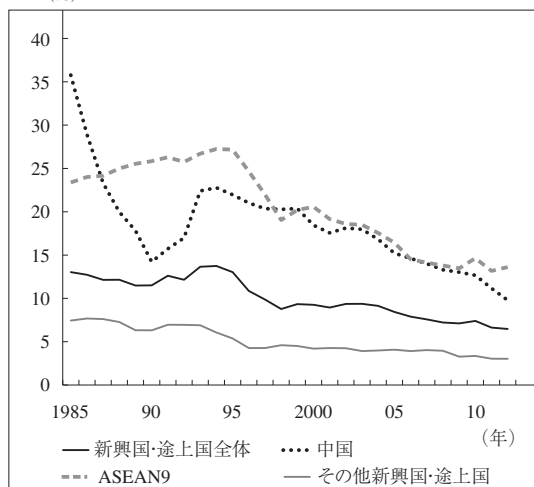
$$\text{B国・地域における日本のA製品のRCA} = \frac{\text{B国・地域の日本からのA製品の輸入額/B国・地域の日本からの輸入総額}}{\text{B国・地域の日本以外からのA製品の輸入額/B国・地域の日本以外からの輸入総額}}$$

分子は、B国・地域の日本から輸入に占めるA製品の割合、分母は、B国・地域のA製品の輸入比率である。値が1を超える場合、B国・地域において日本のA製品の競争力は高く、値が1を下回る場合は、A製品の競争力は低いと判断される。

すでにみたように、日本の新興国・途上国向け輸出は金額では増加傾向にあるものの、新興国・途上国の輸入における日本のシェアは2000年の9.3%から2012年に6.5%に低下した（図表9）。

国・地域別にみると、中国では18.4%から9.8%、ASEANでは20.6%から13.6%、その他新興国・途上国も4.2%から3.0%に低下した。ただし、中国とASEANについては、その水準がまだ高く、競争力を失ったとはいえない。他方、その他新興国・途上国向けは、水準も低く、比率も低下傾向にあり、市場拡大の効果を十分に吸収していない。その他新興国・途上国の経済規模や輸入規模が、中国の1.5倍であることを勘案すると、同地域の輸入市場の開拓に一段の注力が求められる。

図表9 新興国・途上国の対日本輸入のシェア (%)



(資料) UN, COMTRADEより作成

る。

以下では、新興国・途上国の輸入における日中韓のシェアの変化（2000年と2012年）の比較から、中国と韓国との競合関係について分析する。

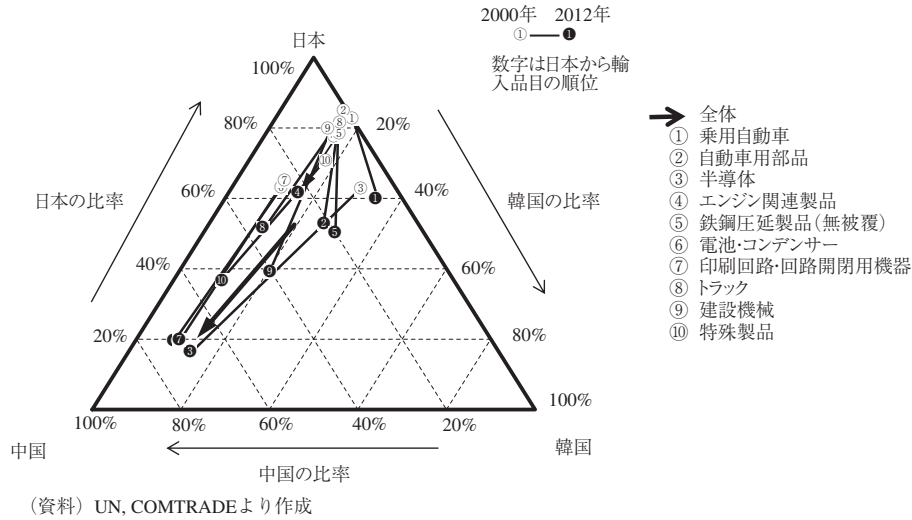
図表10は、日中韓3カ国のシェアの合計を100とし、3国の比率の変化の関係をみたものである。対象とした品目は2012年における日本からの輸入額の上位10品目であり、日本の主力輸出品のプレゼンスの変化と捉えられる。

三角形のそれぞれ頂点は、日本のシェアが100%、中国のシェアが100%、韓国のシェアが100%を示し、その頂点に近いほど、当該国の輸出競争力が強いことを示す。白丸は2000年、黒丸は2012年のシェアを示す。太い矢印は全品目のトレンドを示す。

さて、図表10をみると、全体（全260品目）のトレンドは左下に向かっており、日本優位から中国優位へシフトしていることを示している。上位10品目では、半導体、家電製品、集積回路においてその傾向が強い。新興国・途上国における半導体の日本からの輸入のシェアは、2000年には62.8%を占めていたが、2012年には15.8%に低下し、逆に中国は7.9%から70.1%へ上昇した。

他方、乗用自動車、自動車用部品、エンジン関連製品、鉄鋼圧延製品（無被覆）も下方に動いているが、三角形の上部にとどまっており、日本の競争力はなお高い。詳細にみれ

図表10 日中韓のプレゼンスの変化（中国を除く新興国・途上国）



ば、乗用自動車では、韓国優位（右下に移行）にシフトしており、また自動車用部品、鉄鋼圧延製品（無被覆）は、中国と韓国の優位（真下に移行）に変化している。

以下、同様の手法で中国、ASEAN、その他新興国・途上国の輸入市場の現状、日本の立ち位置、そして日中韓の競合関係を確認したい。

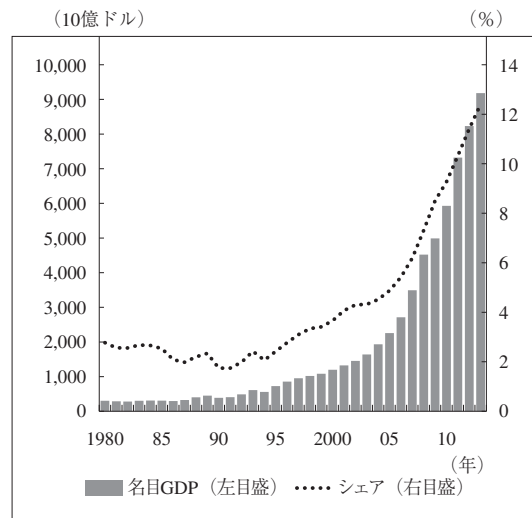
(注5) 『通商白書2013』は、わが国の輸出構造が中国と韓国のそれと似ており、競合関係が強く、輸出競争力の低下に影響していると指摘している。

3. 中国の輸入における日本のプレゼンス

(1) 中国の輸入市場の現状

中国の名目GDPは、1990年の390億ドルか

図表11 中国の名目GDPとシェア



ら2000年に1兆1,980万ドル、2013年には9兆1,810万ドルに増加した。その結果、中国の名目GDPが世界に占めるシェアは、1.7%

から3.7%、12.4%に上昇した（図表11）。一人当たりGDPは、341ドルから946ドル、そして6,078ドルと急上昇した。IMFは、今後6年間の年平均実質成長率を7%と見込んでおり、名目GDPは14兆8,390億ドル、世界の14.7%に上昇し、一人当たりGDPは10,586ドルとなる。

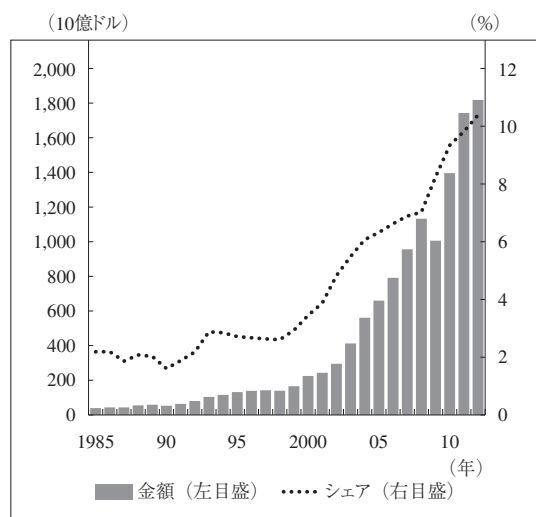
一方、中国の輸入は、1990年の533億ドルから2000年に2,251億ドル、2012年には1兆8,182億ドルに増加した。世界に占めるシェアも1.6%から3.4%、10.4%と飛躍的に上昇し、中国は、アメリカに次ぐ世界第2位の輸入大国になっている（アメリカの輸入は世界の13.2%、日本は同5.1%）（図表12）。

中国の輸入相手国・地域を、先進国と新興国・途上国で分けてみると、先進国からの輸

入は2000年の1,700億ドルから2012年には1兆70億ドルへ5倍以上増加したが、シェアは75.5%から55.4%に低下している。他方、新興国・途上国からの輸入額は、550億ドルから8,110億ドルと約15倍と飛躍的に増加し、シェアは24.5%から44.6%へ上昇した。中国の輸入相手地域が新興国・途上国へ急速にシフトしていることがわかる（図表13）。

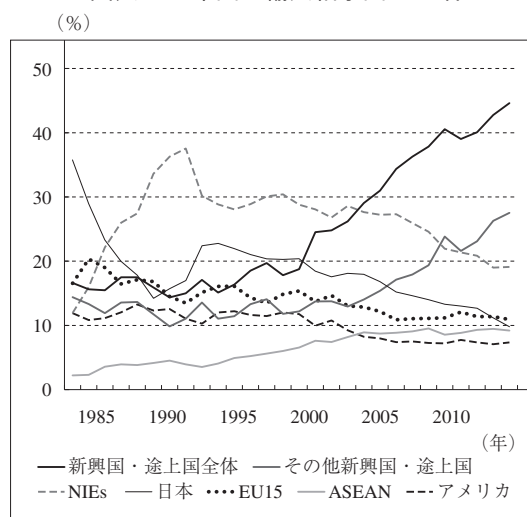
先進国からの輸入は、金額ベースでは急増しているものの、各国・地域のシェアは軒並み低下傾向にある。日本からの輸入は金額では420億ドルから1,780億ドルに増加したが、シェアでは18.4%から9.8%となった。NIEsも630億ドルから3,470億ドルに増加したものの、シェアは28.1%から19.1%へ低下している。

図表12 中国の輸入総額と世界シェア



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表13 中国の輸入相手国・地域



(資料) UN, COMTRADEより作成

他方、新興国・途上国では、ASEANが170億ドルから1,670億ドルと10倍近く増加し、シェアが7.6%から9.2%、その他新興国・途上国は310億ドルから5,010億ドルと16倍以上増加し、シェアも13.7%から27.5%へ上昇した。

中国の輸入品目をSITC 3桁で見ると、2012年は第1位が原油（333、2,208億ドル）、第2位が半導体（776、2,200億ドル）で、この2品目で全体の12.1%を占めた。第3位が鉄鉱石（281、956億ドル）、第4位が特殊製品（931、688億ドル）、第5位が光学機器（871、566億ドル）、第6位が通信機器（764、521億ドル）、第7位が乗用自動車（781、455億ドル）、第8位が銅（682、386億ドル）、第9位が印刷回路・回路閉閉用機器（772、386億ドル）、

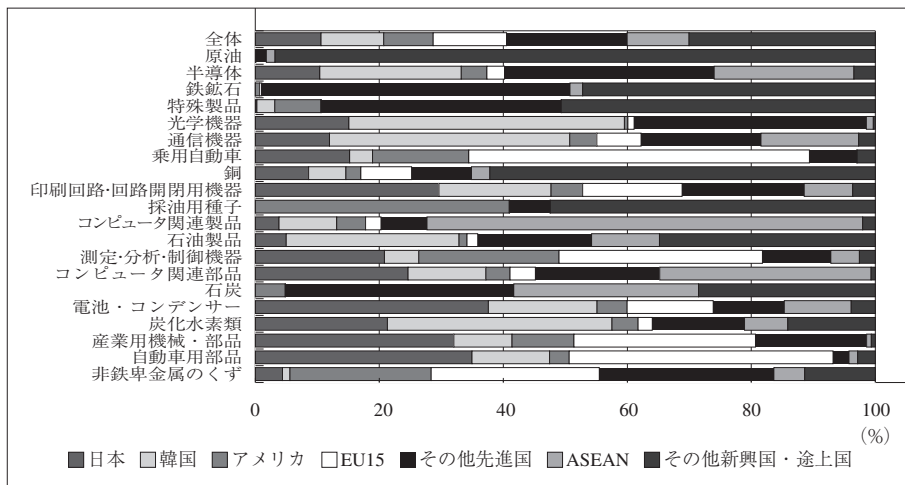
第10位が採油用種子（222、376億ドル）となっている。

品目によって主要な輸入相手国・地域は大きく異なる（図表14）。ただし、上位品目のうち工業製品では先進国から、原材料については新興国・途上国からの輸入が多いのが特徴である。わが国からの輸入のほとんどは工業製品であるが、半導体や光学機器、通信機器、印刷回路・回路閉閉用機器では韓国に圧倒されつつある。この点については後述する。

(2) 日本の中国向け輸出

わが国の中国向け輸出は、2000年以降急増している。2000年の300億ドルから2013年には1,290億ドルに急増し、日本の輸出全体に占める割合は、6.3%から18.2%へ上昇した

図表14 中国輸入上位20品目の輸入相手国・地域（2012年）



(資料) UN, COMTRADEより作成

(図表15)。わが国にとって最大の輸出先である。ただし、先にみたように中国の輸入からみれば、日本のシェアは18.4%から9.8%にほぼ半減している。

中国の2012年の日本からの輸入は、第1位が半導体(776、197億ドル)、第2位が印刷回路・回路開閉用機器(772、82億ドル)、第3位が自動車用部品(784、77億ドル)、第4位が産業用機械・部品(728、72億ドル)、第5位が電池・コンデンサー(778、70億ドル)、第6位が乗用自動車(781、69億ドル)、第7位が光学機器(871、69億ドル)、第8位が測定・分析・制御機械(874、54億ドル)、第9位が炭化水素類(511、50億ドル)、第10位が工作機械(731、49億ドル)となっている。

輸入額が、2000年に比べて2012年に増加し

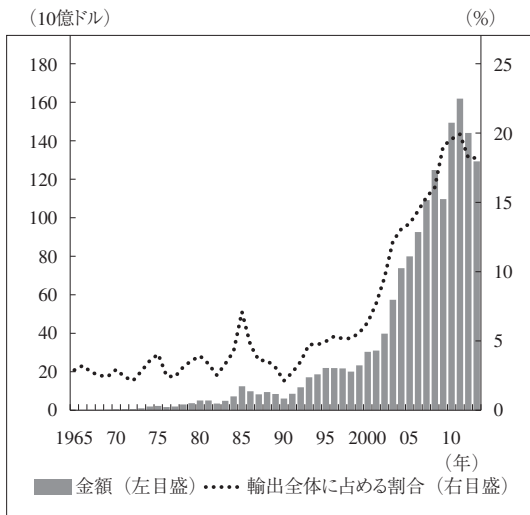
た品目は206品目で、2倍以上になったのは176品目、4倍以上になったのは114品目と多くの品目で金額が急増した。なかでも自動車用部品は12.7倍となった。

しかし、輸入に占めるシェアで見ると低下した品目は、176品目と全体の65%を超える。たとえば、輸入金額では最も多い半導体のシェアは2000年の25.2%から2012年に9.0%、次いで多い印刷回路・回路開閉用機器も29.0%から21.2%に低下した。

もちろんシェアが上昇した品目も76品目と少なくない。とくに自動車用部品は同期間に28.4%から34.9%に、工作機械も37.1%から44.0%に上昇させた。これらは中国の輸入市場で圧倒的な競争力を有する。

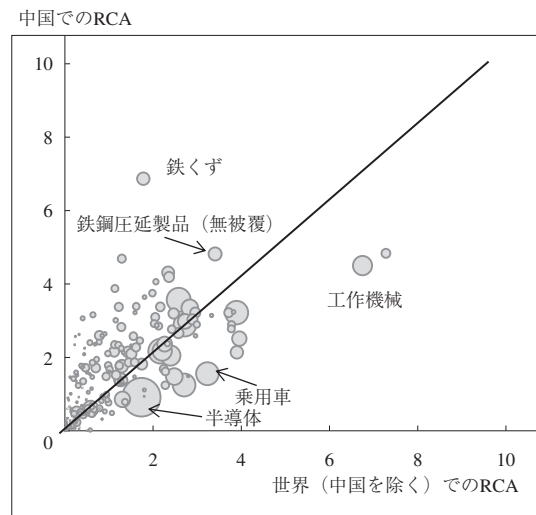
図表16は、日本の中国RCAと世界RCAを

図表15 日本の対中国輸出



(資料) UN, COMTRADE

図表16 日本からの輸入RCA (2012年)



(注) 円の大きさは金額の大きさを示す。

(資料) UN, COMTRADEより作成

比較したものである。

図表8に比べると分散が大きいことがわかる。また、とくに金額の大きい（バブルが大きい）品目で45度線より下方に位置しているものが少なくない。つまり、世界でのRCAが高い製品が中国市場でも必ずしも高い競争力を有するわけではない（中国でのRCAが低い）。たとえば、日本からの輸入で最も金額が大きい半導体は、世界でのRCAが1.8であるが、中国では0.9と1を下回っている。乗用自動車は世界でのRCAが3.7であるが、中国では1.7しかない。

他方、中国でのRCAが1.5を超え、世界でのRCAよりも1.5倍以上高い品目は63品目と多い。たとえば、自動車用部品では、世界でのRCAが2.8であるに対して中国でのRCAは4.9とさらに高く、中国において日本の自動車用部品の競争力が高いことを示している。その他、金額の大きいものとしては、鉄鋼圧延製品（無被覆）、鉄くず、合金鉄圧延製品などがあるが、少額のものが多い。他方、世界でのRCAが1.5を超え、中国でのRCAが1.5倍以上高い品目は11品目であるが、金額の大きいものからあげると、乗用自動車のほかに光学機器、銅などがある。

(3) 韓国との競合関係

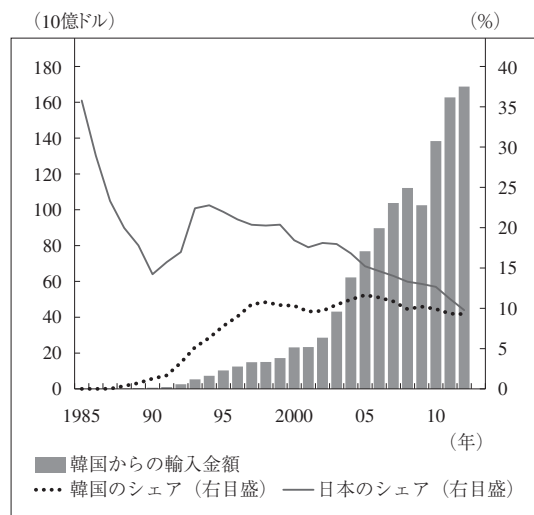
次に中国の輸入市場における韓国との競合関係をみておきたい。

中国の韓国からの輸入は、1990年の7億ドル

から2000年に232億ドル、2012年には1,687億ドルとなり、2013年は日本を上回った見込みである。ただし、輸入に占める韓国のシェアは、2000年の10.3%から2012年には9.3%に低下している（図表17）。2000年と2012年の輸入において韓国がシェアを上昇させた品目は112品目、シェアを低下させた品目は136品目となっている。

中国における韓国からの輸入をSITC 3桁で見ると、第1位が半導体(776、431億ドル)、第2位が光学機器(871、203億ドル)、第3位が通信機器(764、101億ドル)、第4位が石油製品(334、92億ドル)、第5位が炭化水素類(511、86億ドル)、第6位が印刷回路・回路開閉用機器(772、50億ドル)、第7位がカルボン酸類(513、34億ドル)、第8位電池・

図表17 中国の対韓国輸入



(資料) UN, COMTRADEより作成

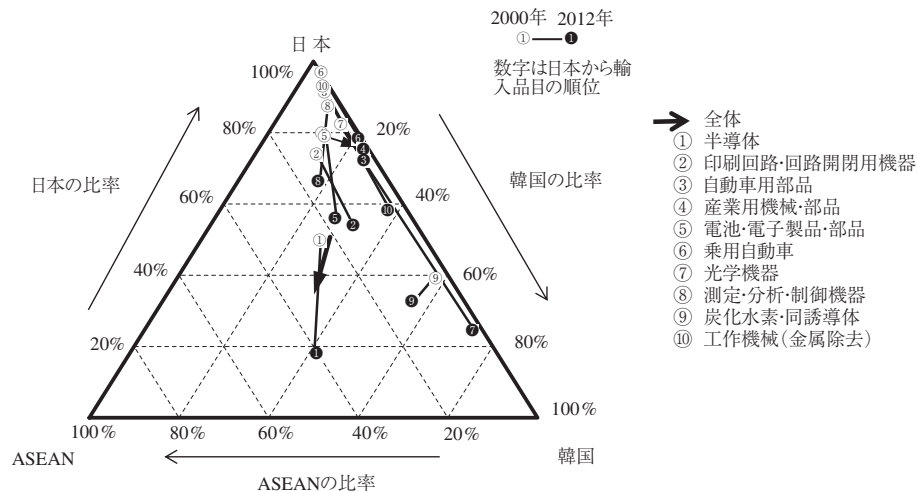
コンデンサー（778、33億ドル）、第9位プラスチック雑製品（575、31億ドル）、第10位自動車用部品（784、28億ドル）であり、日本と同様に工業製品が圧倒的に多い。また、上位10品目では6品目（半導体、光学機器、炭化水素類、印刷回路・回路開閉用機器、電池・コンデンサー、自動車用部品）が日本と重複している。重複する品目の輸入金額は、韓国では全体の49.2%、日本は30.7%を占め、競合の影響は小さくない。

中国の輸入市場における日本と韓国の競合関係をシェアの変化からみる。ここでは、日本と韓国にASEANを加え評価した（図表18）。

全体（全260品目）のトレンドは、ほぼ真下へシフトしており、日本の競争力が総じて

弱まる方向にあることが示されている。そのなかで日本のシェアはまだ高く、日本劣位になったとはいきれない。ただし、半導体のトレンドは、真下に大きく動いており、韓国とASEANとの競争が強まっていることがわかる。日本からの半導体の輸入シェアは、16.3%ポイント低下したのに対し、韓国は5.0%ポイント、ASEANは6.5%ポイント、シェアを高めている。ただしASEANとの競合には、ASEANにある日本企業が生産した製品が多く含まれている可能性があることに注意したい。光学機器では韓国の台頭が目覚ましく、右下に大きくシフトしている。ちなみに、光学機器は日本が30.3%ポイント、シェアを低下させたのに対し、韓国は27.8%ポイント、シェアを高めた。

図表18 日韓ASEANのプレゼンスの変化（中国）



（資料）UN, COMTRADEより作成

その他の品目でも、まだ日本のシェアが高いものの、韓国との競争が強まっている（右下方向にシフト）ことを考えると、シェア維持のための取引先の新規開拓を含めたマーケティングを強化し、市場を確保していく必要がある。

4. 日本のASEAN向け輸出

(1) ASEANの輸入市場の変化

次にASEAN市場に目を転じる。

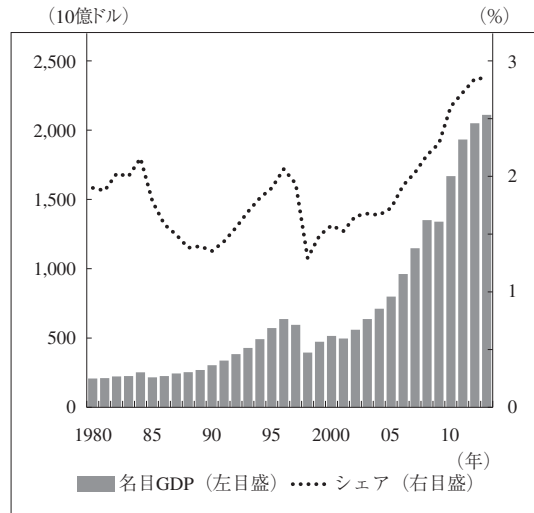
ここでは新興国・途上国市場という観点から、ASEANはシンガポールを含まない加盟9カ国を対象とする。

2013年のASEANの名目GDPは2兆1,100億ドルであり、日本の約2分の1である（購買力平価ベースでは8割）。世界の名目GDPに占めるシェアは2000年の1.6%から2013年には2.9%に上昇した（図表19）。中国と比べれば見劣りがするが、今後も世界平均を上回る成長が見込まれ、2019年には3.2%に上昇する見通しであり、購買力平価ベースGDPは2018年に日本を追い抜く。

経済規模の拡大に伴い、ASEANの輸入も2000年の2,290億ドルから2012年には8,110億ドルに4倍近く増加した。その結果、世界に占めるシェアは3.5%から4.6%へ上昇した（図表20）。

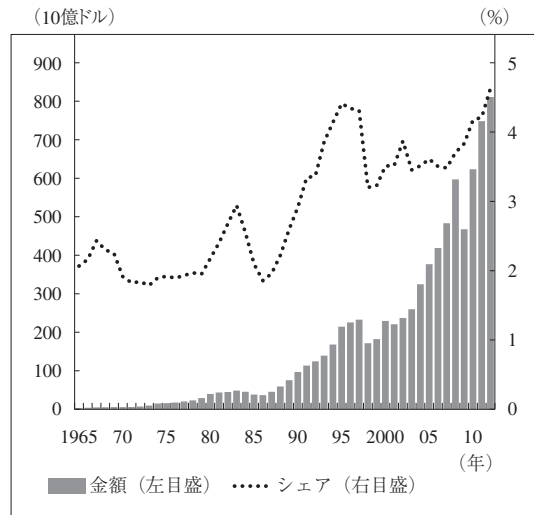
ASEANの輸入は、先進国からが52.8%、

図表19 ASEANの名目GDPとシェア



(注) ASEANはシンガポールを除く加盟9カ国。
(資料) IMF, *World Economic Outlook*, April 2014

図表20 ASEANの輸入総額と世界シェア

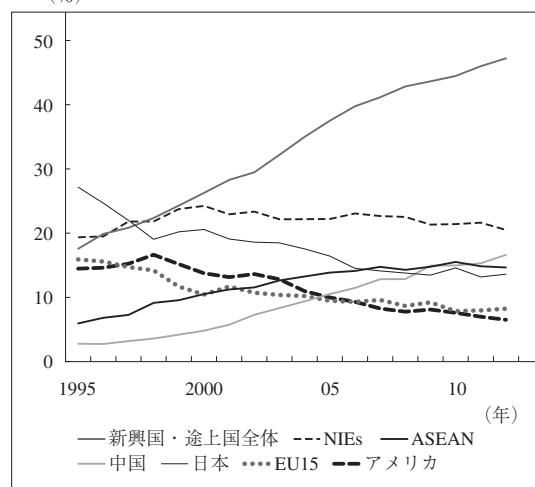


(注) ASEANはシンガポールを除く加盟9カ国。
(資料) UN, COMTRADEより作成

新興国・途上国からが47.2%とほぼ均衡している。2000年には主要輸入相手国地域は、先進国で、日本が20.6%、EU15が10.4%、アメリカが13.8%、NIEsが24.2%と、これら4カ国・地域で全体の69.0%を占めていた。しかし、2012年には、日本が13.6%、EU15が8.2%、アメリカが6.5%と大幅にシェアを低下させ、NIEsは20.5%と高い水準を維持したものの、この4カ国・地域の合計は48.8%に低下した。このようななか、韓国は5.5%から6.1%とシェアを上昇させている（図表21）。

他方、新興国・途上国では、中国が4.8%から16.6%と飛躍的にシェアを拡大させ、ASEAN 9カ国の域内シェアも10.5%から14.7%と上昇した。その他新興国・途上国も10.9%から15.9%に上昇した。

図表21 ASEAN9の輸入相手国・地域 (%)



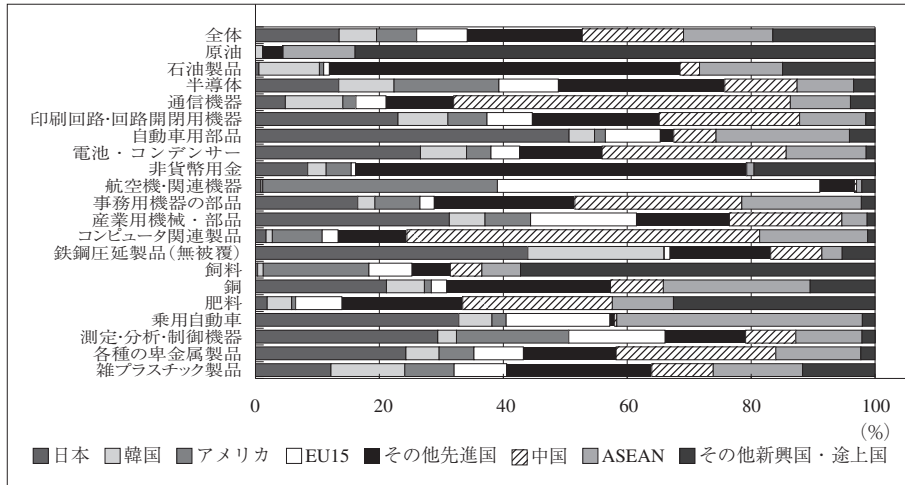
(資料) UN, COMTRADEより作成

2012年の輸入品目をみると、第1位が原油(333、639億ドル)、第2位が石油製品(334、627億ドル)、第3位が半導体(776、623億ドル)、第4位が通信機器(764、282億ドル)、第5位が印刷回路・回路開閉用機器(772、174億ドル)、第6位が自動車用部品(784、152億ドル)、第7位が電池・コンデンサー(784、143億ドル)、第8位が非貨幣用金(971、142億ドル)、第9位が航空機・関連機器(792、138億ドル)、第10位がコンピュータ関連製品(759、134億ドル)となっている。品目によって主要輸入国は異なる。(図表22)

第1位の原油はその他新興国・途上国が圧倒的に多く、石油製品ではその他先進国からの輸入が多い。半導体では、先進国からの輸入が全体の75.7%を占める。第4位の通信機器では、先進国のシェアは32.0%と低く、新興国・途上国では中国が54.3%と圧倒的シェアを占める。第5位の集積回路では先進国が65.2%と高く、その中心は日本(23.0%)、NIEs(26.8%)となっている。第6位の自動車用部品については、先進国が67.5%と高いがその4分の3を日本(50.6%)が占めている。

その他、日本のシェアが比較的高い品目としては、電池・コンデンサー、産業用機械・部品、鉄鋼圧延製品(無被覆)、乗用自動車、卑金属製品などがあげられる。

図表22 ASEAN輸入上位20品目の輸入相手国・地域（2012年）



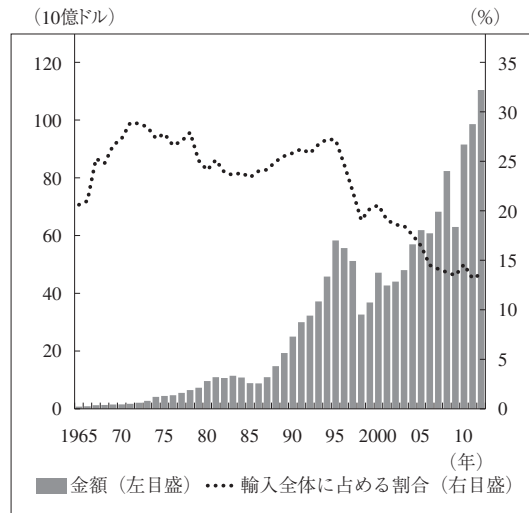
(資料) UN, COMTRADEより作成

(2) 日本のASEAN向け輸出

ASEANの日本からの輸入は、1990年の250億ドルから2000年に472億ドル、2012年には1,116億ドルに増加した。長期的にみると、1985年のプラザ合意以降日本企業が同地域への投資を本格化させたことを背景に増加した(図表23)。ただし、ASEANの輸入に占める日本シェアは1994年の27.2%をピークに低下傾向にあり、2012年には13.6%となっている。

2012年のASEANの日本からの輸入を品目別にみると、第1位が半導体(776、82億ドル)、第2位が自動車用部品(784、77億ドル)、第3位が鉄鋼圧延製品(無被覆)(673、46億ドル)、第4位がエンジン関連製品(713、43億ドル)、第5位が印刷回路・回路閉閉用機

図表23 ASEANの日本からの輸入



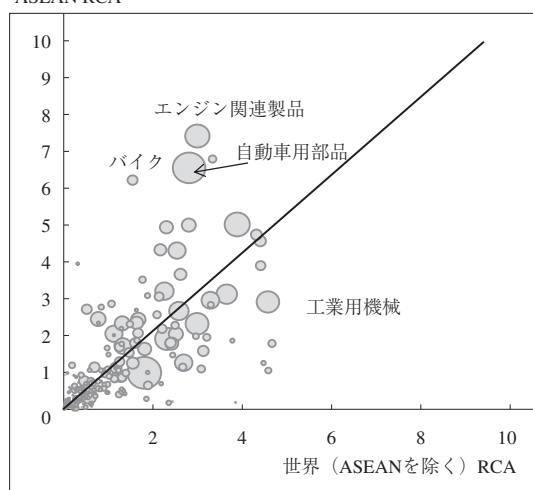
(注) ASEANはシンガポールを除く加盟9カ国。
(資料) UN, COMTRADEより作成

器（772、40億ドル）、第6位が電池・コンデンサー（778、38億ドル）、第7位が産業用機械・部品（728、37億ドル）、第8位が乗用自動車（781、30億ドル）、第9位が測定・分析・制御機械（874、27億ドル）、第10位が鉄鋼管（679、25億ドル）である。

2012年の輸入額が2000年を上回った品目は215品目で、2倍以上になったのは166品目、4倍以上になったのは72品目であった。他方、シェアを拡大させた品目は60品目で、金額の大きいものから測定・分析・制御機械、鋼管、工作機械（金属除去）などがあるが、シェアが低下した品目は198品目あり、10%ポイント以上低下したものは53品目と多い。

ASEANでのRCAが1.5を上回り、世界でのRCAの1.5倍を超える品目は25品目ある

図表24 世界RCAとASEAN RCAの比較(2012年)
ASEAN RCA



(注) 円の大きさは金額の大きさを示す。
(資料) UN, COMTRADEより作成

(図表24)。金額の大きい品目からあげると、自動車部品、エンジン関連製品、鉄鋼圧延製品（被覆）、卑金属製品、棒鋼、プラスチック製品などであり、自動車関連の材料、部品が多いのが特徴である。

他方、世界でのRCAが1.5を超え、ASEANでのRCAの1.5倍の水準にある品目は20品目であり、金額の大きいものでは、半導体、産業用機械、コンピュータ関連製品、プラスチックの板・フィルムなどが該当する。

全体で見ると、自動車関連製品の競争力が高く、電子関連製品の競争力が弱いという対照的な動きになっている。

(3) ASEANにおける中国と韓国との競合

ASEANの輸入市場では、中国と韓国との競合関係が強まっていることが考えられる。

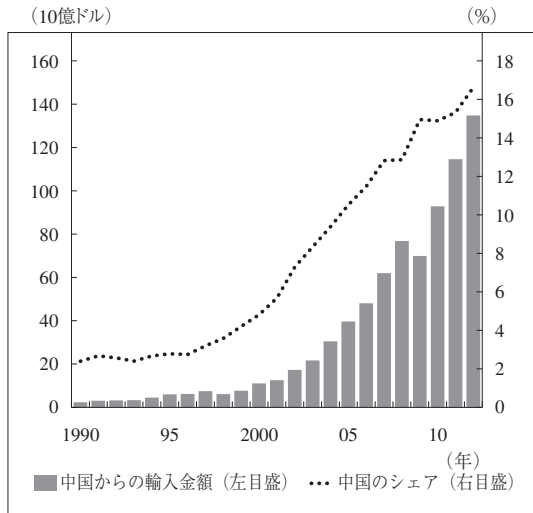
ASEANの中国からの輸入は、1990年の20億ドルから2000年に110億ドル、2012年には1,350億ドルに増加した。シェアは同期間に2.4%から4.8%、16.6%に上昇している(図表25)。

韓国も同様に1990年の30億ドルから2000年に130億ドル、2012年には500億ドルに増加し、シェアは2.9から5.5%、6.1%に上昇した(図表26)。

図表27は、ASEANの輸入市場における日中韓の競合関係をみたものである。

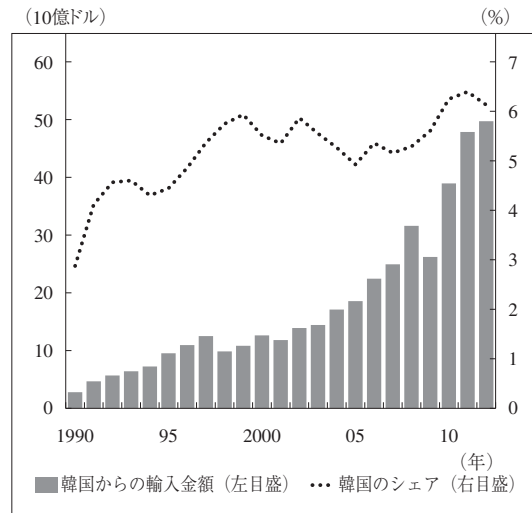
全体のトレンドとして、左下、すなわち中国優位へシフトする傾向にあることがわか

図表25 ASEANの対中国輸入



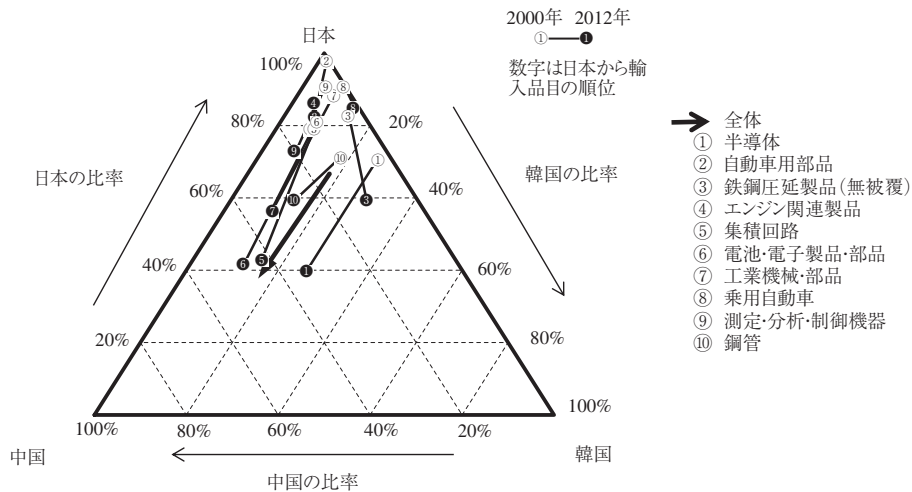
(資料) UN, COMTRADEより作成

図表26 ASEANの対韓国輸入



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表27 日中韓のプレゼンスの変化 (ASEAN)



(資料) UN, COMTRADEより作成

る。ただし、なお日本の比率は高く（三角形の上部に位置し）、中国との競合は強まっているものの、日本が劣位であるわけではない。

ただし、印刷回路・回路開閉用機器や電池・コンデンサーにおいて中国が競争力を高めていることは確かである。また半導体でも同様

の動きがあり、韓国も中国の台頭に苦戦していることがわかる。他方、韓国との間では、鉄鋼圧延製品（無被覆）との競合が強まり始めている。

5. 日本のその他新興国・途上国向け輸出

(1) その他新興国・途上国

最後に、中国とASEANを除くその他新興国・途上国についてみる。

その他新興国・途上国の名目GDPは、2000年の5兆5660億ドルから2013年には19兆2,500億ドルと3倍以上に増加した。その結

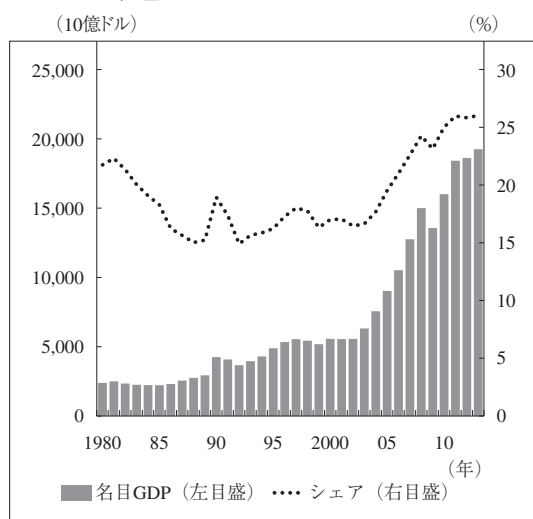
果、世界に占めるシェアは、同期間に17.0%から26.0%に上昇した（図表28）。2013年の経済規模は、中国の1.5倍に相当する。

このなかで名目GDPが最も大きいのは、ブラジル（2兆2,430億ドル）で、次いでロシア（2兆1,180億ドル）、インド（1兆8,710億ドル）の順となっている。

このような経済規模の拡大と所得水準の上昇に伴い輸入も増加した（図表29）。

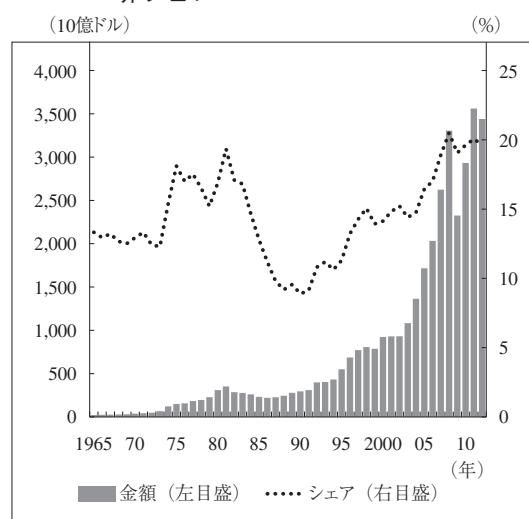
その他新興国・途上国の輸入は、1990年の2,952億ドルから2000年に9,226億ドル、2012年には3兆4,400億ドルに増加した。これにより、世界に占めるシェアも8.9%から14.1%、19.6%に上昇した。2012年の輸入額は、中国の約1.9倍の規模を有する。

図表28 その他新興国・途上国の名目GDPとシェア



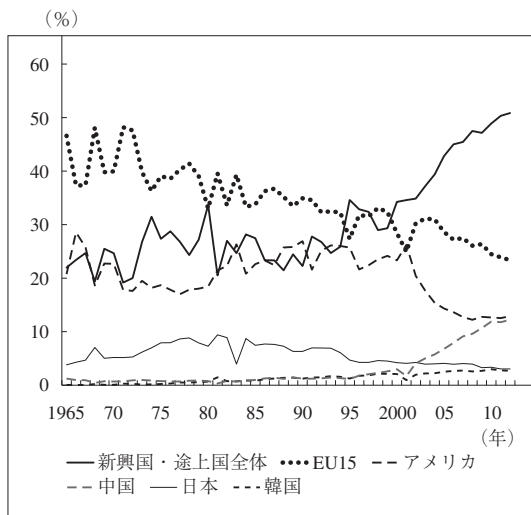
(資料) IMF, World Economic Outlook, April 2014

図表29 その他新興国・途上国の輸入総額と世界シェア



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表30 その他新興国・途上国の輸入相手国・地域



(資料) UN, COMTRADEより作成

輸入相手国・地域をみると、新興国・途上国のシェアが上昇している。新興国・途上国からの比率は2000年の34.2%から2012年に50.9%に上昇しており、先進国からの輸入をすでに上回っている。その他新興国・途上国からの輸入がそのうち7割を占める。その他中国が2000年の3.0%から2012年には12.2%に上昇している。またASEANも2.3%から3.4%に上昇した(図表30)。

わが国のシェアは4.2%から3.0%に低下したが、NIEsは4.5%から4.6%と安定的に推移しており、とくに韓国との間での競合関係が強まっていると推測される。

2012年の輸入品目をみると、第1位が原油(333、2,772億ドル)、第2位が石油製品(334、2,157億ドル)、第3位が乗用自動車(781、

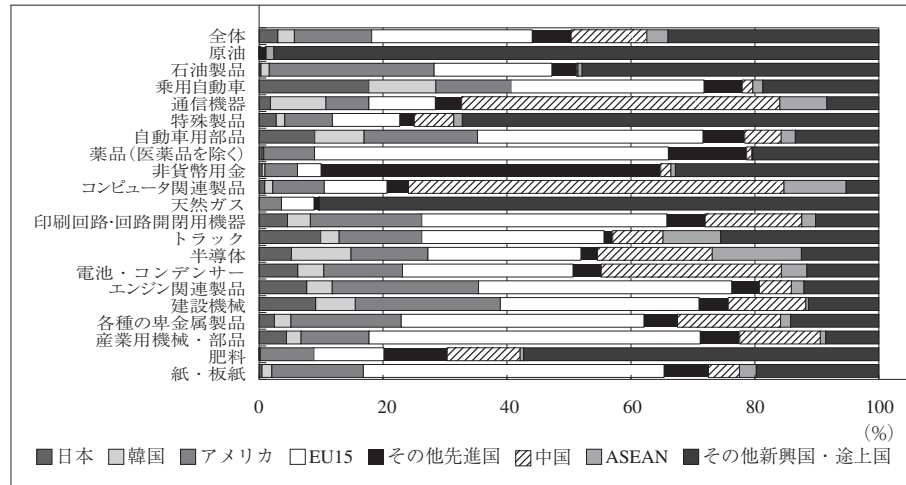
1,279億ドル)、第4位が通信機器(764、1,212億ドル)、第5位が特殊製品(931、1,181億ドル)、第6位が自動車用部品(784、859億ドル)、第7位が薬品(542、662億ドル)、第8位が非貨幣用金(971、660億ドル)、第9位がコンピュータ関連製品(752、547億ドル)、第10位が天然ガス(343、544億ドル)であり、鉱物資源や完成品の輸入が多く、中国やASEANにおいて多かった電子製品・部品は少ない(図表31)。上位品目において日本のシェアは乗用自動車を除いて低く、EUと中国のシェアが高い。

(2) その他新興国・途上国の日本からの輸入

その他新興国・途上国の日本からの輸入は、2000年の390億ドルから2012年には1,040億ドルに増加した。ただし輸入全体に占める日本のシェアは同期間に9.3%から6.5%に低下している(図表32)。2000年と2012年の輸入において日本のシェアが上昇した品目は86品目で、他方シェアが低下した品目は171品目に及ぶ。

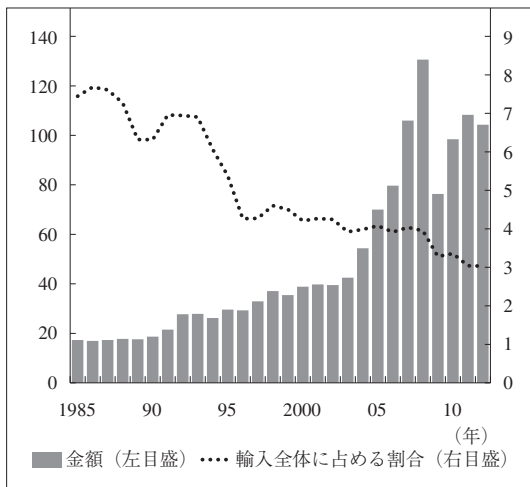
その他新興国・途上国の日本からの輸入の第1位は、乗用自動車(781)で225億ドルと圧倒的に多く、全体の20.5%を占める。第2位が自動車用部品(784、77億ドル)、第3位がトラック(783、447億ドル)と、自動車関連が上位を占めている。第4位が建設機械(723、35億ドル)、第5位が特殊製品(931、

図表31 その他新興国・途上国輸入上位20品目の輸入相手国・地域（2012年）



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表32 その他新興国・途上国の日本からの輸入
(10億ドル) (%)



(資料) UN, COMTRADEより作成

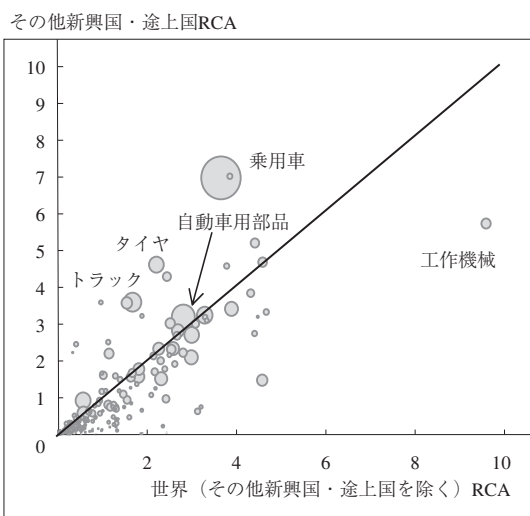
32億ドル)、第6位がタイヤ(625、32億ドル)、第7位がエンジン関連製品(713、31億ドル)、第8位が電池・コンデンサー(778、25億ドル)、第9位が鉄鋼圧延製品(無被覆)(673、24億ドル)、第10位が印刷回路・回路開閉用機器(772、22億ドル)となっている。

その他新興国・途上国でのRCAが1.5を上回り、世界でのRCAより1.5以上高い品目は8品目と少ない。金額の大きいものから乗用車、トラック、タイヤ、バイク、光学機器、船舶であり、自動車関連が多いのが特徴である(図表33)。

(3) 中国と韓国との競合関係

その他新興国・途上国における中国と韓国との競合関係をみる。

図表33 世界RCAとその他新興国・途上国RCAの比較（2012年）

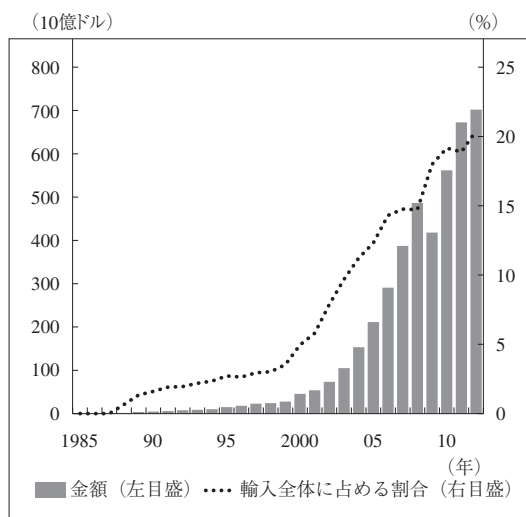


(注) 円の大きさは金額の大きさを示す。
 (資料) UN, COMTRADEより作成

その他新興国・途上国の中国からの輸入は、1990年のわずか20億ドルから2000年に280億ドルに、2012年には4,240億ドルに増加した(図表34)。これに伴い輸入に占める中国シェアは、1.6%から5.0%、20.4%に上昇した。2000年と2012年を比較して、輸入シェアが上昇した品目は224品目に達する。

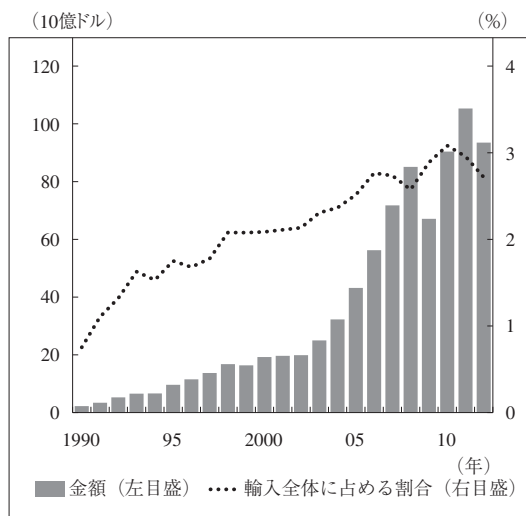
他方、その他新興国・途上国の韓国からの輸入は、1990年の20億ドルから2000年に190億ドルに、2012年には930億ドルに増加した(図表35)。輸入に占める韓国のシェアは、同期間に0.8%から2.1%、2.7%と水準は低いものの上昇基調にあり、日本との差は急速に縮まっている。2000年と2012年を比較して、輸入シェアが上昇した品目は169品目であり、日本のほぼ倍である。

図表34 その他新興国・途上国の中国からの輸入



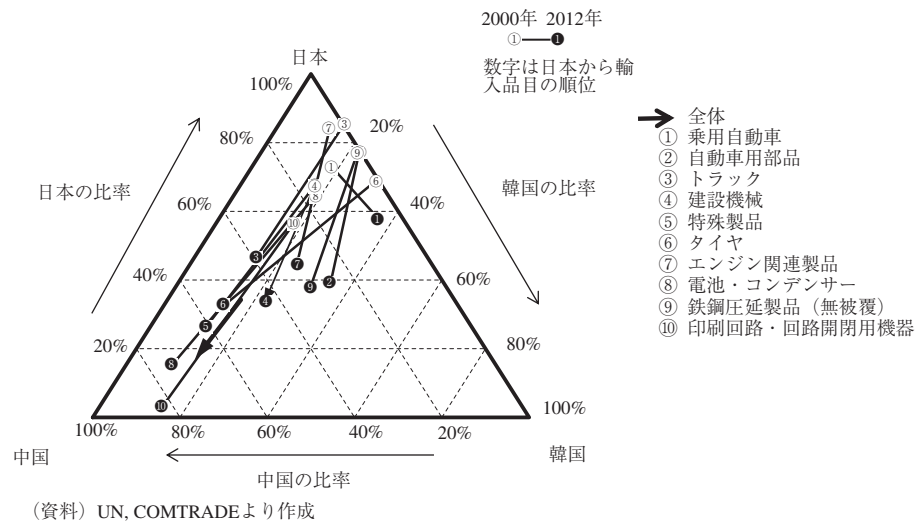
(資料) UN, COMTRADEより作成

図表35 その他新興国・途上国の韓国からの輸入



(資料) UN, COMTRADEより作成

図表36 日中韓のプレゼンスの変化（その他新興国・途上国）



図表36は、日中韓の競合関係をみたものである。全体（全品目）のトレンドは左下に向かっていて、中国優位、日本劣位の状況にある。電池・コンデンサーや印刷回路・回路開閉用機器などで、この傾向が強い。

自動車関連製品は、まだ日本の優位性が高いが、近年は乗用自動車、自動車用部品、鉄鋼圧延製品（無被覆）ともに韓国との競合が強まる傾向にある。

まとめ

本稿では、わが国の新興国・途上国向け輸出は金額ベースでは増加しているものの、輸入国・地域の輸入統計からみると、輸入に占めるシェアは低下傾向にあることを示した。

もちろん、本稿で議論したのは、輸出競争力であって、日本企業の競争力そのものと考えべきではない。経済産業省『通商白書2013』が指摘するように、「日本製品（カメラおよびビデオカメラ、ビデオプレーヤー、テレビ、電子レンジ、乗用車および小型トラック）は、わが国の輸出シェアに比べて日本企業の世界販売シェアが大きく、世界販売シェアが上昇傾向にある製品もみられる。これらの結果は、わが国の輸出競争と現地生産を含めた日系企業の世界販売競争力が必ずしも同じ動きを示すものではない」。

とはいうものの、近年貿易収支が悪化していることを考えると、その改善の観点からも新興国・途上国向け輸出の促進は重要であり、本稿で指摘したシェアの低下の原因究明と対

策を急がねばならない。

本稿では、新興国・途上国における日本の輸入シェア低下の一因として中国、韓国との競合関係が厳しくなっていることを指摘した。とくに東アジア以外の新興国・途上国(本稿では、その他新興国・途上国)の輸入におけるわが国の水準は極めて低い。中国がシェアを拡大させ、韓国が日本と肩を並べつつある現状を考えると、市場開拓の戦略を全面的に見直す必要があるかもしれない。

もちろん、中国製品の価格競争力が強いことは想像に難くない。中国との競合製品について単価をみると、日本と中国には5倍以上の格差があるものも少なくない。同カテゴリーの品目で単価の格差が大きいということ

は、異なる別の品目が含まれている可能性があるため、一概に価格格差だけが原因とはいえない。しかし、わが国はコモディティ化した製品の生産はASEANに移管するなどして、新興国・途上国向けのサプライチェーンを構築する必要があるだろう。

東アジアの新興国・途上国市場(中国とASEAN)においては、日本のシェアは低下傾向にあるものの競争力はまだ高い。しかし、資本財や中間財・部品などにおいても中国や韓国との競合関係が徐々に強まっていることには注意したい。とくに中国市場において主要輸出品のシェアが韓国に奪われていることへの対処は急務である。